

## 造形ワークショップを通じた大学と行政、 地域の連携による子育て支援

——横浜市栄区・鎌倉女子大学連携事業  
「アート・キャラバン」の実践を通して——

矢野 真 (児童学科・講師) ・高垣 マユミ (児童学科・教授),  
田爪 宏二 (子ども心理学科・助教授)

### **Child-raising support through modelling workshop activities in concert with the university, local authorities and civic groups: Combined practical activity of Sakae Ward, Yokohama City and Kamakura Women's University called "Art Caravan"**

Yano, Makoto · Takagaki, Mayumi · Tazume, Hirotsugu

#### **Abstract**

The purpose of this research is to provide practical child raising support through modelling workshop activities called "Art Caravan" as a combined activity of Sakae Ward in Yokohama City, Kamakura Women's University, local authorities and civic groups.

The actual form of this venture is that between April 2006 and March 2007, there should be a total of 12 workshops for infants and their parents featuring four different types of modelling activities, three times per type, after which the participating parents will be asked to fill in a questionnaire. This time, based on the results and any problems that were brought to light from the first questionnaire, as well as points for amelioration, participants were able to report on how the next modelling workshop should be improved.

Throughout the actual practice, communication between the parents and the infants was promoted; moreover, university mentors suggested ways in which the modelling workshop could be effective in providing child-raising support and there was also a great deal of communication between students and parents. Furthermore, looking towards future practice sessions, we intend to continue to promote interaction between the parents and the infants by means of the intellectual resources at the disposal of the university. We have also been able to study the role of the local administration in bringing the two parties together with the result that child-raising support is being provided by a threesome partnership.

Keywords : Art Caravan, Modelling workshop, Child-raising support, Combined practical activity

キーワード : アート・キャラバン、造形ワークショップ、子育て支援、連携事業

## 1. 問題と目的

### (1) はじめに

近年の急速な社会変化によって、子どもの生活や子育てをめぐる環境にも様々な課題が発生している。子どもをとりまく生活環境においては、都市化、住環境の過密化による生活環境の変化、遊び場の喪失、子どもが被害をうける様々な事件、事故などの問題が挙げられる。これらの問題は、子どもが充実した遊びを行うことができないこと、さらには遊びを通して得られる知的、社会的経験が不足し、子どもの健全な発達が阻害されかねないことを意味している。一方で、子どもと共に子育ての当事者である親においても、親自身のライフスタイルの変化、子育てをめぐる情報の多様化、核家族化による子育て文化の断絶や相談相手の不在、育児におけるストレスなど、様々な変化や問題が生じている。大都市子育て環境研究会(2002)によれば、特に大都市部を中心として、子育て中の母親のストレスには生活空間や自然、空気、騒音といった物理的な環境問題以上に、生活習慣・人間関係やライフスタイルなどの人的、社会的な環境問題の影響が大きいこと、子育ての様々な環境に対して敏感になりがちで、ストレスを受けやすい状況にあることが指摘されている。このような背景から、現代の社会においては心身ともに健やかに子育てを行うことが難しくなってきたといわれる。

このような子育てをめぐる情勢と、子育て支援に対するニーズの増加をふまえ、近年では地域、行政の中で子育て支援事業が活発化してきている。例えば、鎌倉女子大学の所在する鎌倉市や近隣の横浜市などでは、行政が積極的に地域の子育て支援政策を打ち出したり、横浜市栄区にある私立幼稚園において17時以降の預かり保育や園庭開放を実施するなど、幼児教育、保育機関からの子育て支援活動も増加している。また松永(2005)が、子育て支援は「親が主体的に子育てをすることを支援すること」、そして「子育ての「労力」を市場で購入できる商品や福祉サービスに依存して解消しようとするのではなく、「労力」を引き受けて子育ての楽しさを実感できるように自立す

ることを支援することである」と指摘するように、子育て支援活動においては、家庭の積極的な参加、すなわち親が主体的に、子どもと共に活動できる場を提供することが重要であると考えられる。

このような家庭と地域、行政との連携による子育て支援が行われるなかで、大学との連携、特に大学の持つ知的、人的資源に対する期待が高まりつつある。地域の子育て支援において大学が貢献できることを考えるとき、主に3点が挙げられる。すなわち、第1には行政や地域に対する、子育て支援事業や政策に対する理論的、学問的知見の提供である。第2には家庭、すなわち親に対する様々な情報提供や相談活動、さらには子ども(または親子)に対する遊びの提案、遊び場の提供といった、より実践的、直接的な支援である。第3には、保育者を志す学生など、子育て支援への有用なマンパワーの提供である。

鎌倉女子大学児童学部においては、幼稚園教諭、保育士養成課程をもつという特性から、幼児教育、中でも特に様々な造形教材に対する豊富な資源を有している。本研究における実践活動では、子育て支援にこれらの資源を有効に活用するという立場から、造形ワークショップである「アート・キャラバン」事業を行政と大学との協力により立案、実施した。この事業は、指定管理者制度の導入により民間事業者(神奈川共立・共立・JSS共同事業体)が公共施設(栄区民文化センター・リリス)の運営を行うことになった横浜市栄区により、子育て支援の一環として大学と連携し、大学のもつ知的資源を提供した実践を通して、広く栄区の子育て支援に貢献することを目指したものである。このワークショップの特色は、特定の場所で開催するのではなく、栄区民が平等に参加できるように保育園や幼稚園、子育て支援サークルなどに出張訪問を行うといった、新たな試みを提案した子育て支援であることが注目すべき点である。様々な支援の仕方があるなかで、音楽などの提案もされたが、今回は大学の知的資源を生かした造形を中心とした実践を通じて、子育て支援を考察していくことが有効であると考えた。

### (2) 本研究の目的

本研究の目的は、横浜市栄区と鎌倉女子大学との連携事業による造形ワークショップである「アート・キャラバン」の実践を通して、行政と地域住民、大学との連携による子育て支援について検討することである。この実践は栄区の行政と地域住民、そして大学との連携であると共に、子どもと親、教員と学生、学生と子ども、学生と親など、様々な子育て支援のあり方を考えることが可能な実践である。特に、実践を通じて、親がどこまで子どもの造形に関わっていくかということについて明確にする場を提供し、子どもの造形やその援助に対する親の理解を高めていくことができる。同時に、学生は教育・保育実習やボランティアにおいて子どもたちと接する機会はあるが、その親と接する機会は少ない現状にある。保育者が保育をする対象は子どもだけではなく、その保護者も含まれる。しかしながら、現場に出た学生が親とのトラブルや対処などをどうしたらよいかわからないという悩みも聞かれる。本実践は、学生をして子育て期にある親の実際の姿を理解させるとともに、その親とのコミュニケーションの促進について実践を通して学ぶことにより、今日求められる子育て支援者としての保育者の資質を涵養する上で効果を持つといえよう。また、子どもの造形活動について、授業で学んで身につけた実践的な内容を用いることは、学生にとってよりスムーズに親と関わることのできる契機ともなるであろう。

また本研究では、「子育て支援」の目的を、「保育に欠ける、もしくは育児に悩む保護者に対するサポート」としては捉えていない。すなわち、いわゆる「マイナスを正常に」という支援ではなく、「プラスへ」の支援として位置づけている。親と子どもとが共に造形活動を行うことで、親子の間に豊かなコミュニケーションが生まれる。また親は子どもの造形活動を通して子どもの持つ能力や、独特な世界観に触れることができ、これはより充実した子ども理解へとつながる。このように、親子のコミュニケーションの促進、大学のもつ知的資源の提供、さらには両者を結びつける場を提供する行政の役割という、実践活動を通じた子育て

て支援を提供する場をつくり上げていくことが、「アート・キャラバン」の趣旨である。本研究では、上述した目的に基づき、「アート・キャラバン」の実践事例を紹介しながら、本稿の第1著者が実践者の立場から造形表現を通じた子育て支援について検討を加えていく。

## 2. 研究方法

### (1) 事業計画

指定管理者制度の導入により民間事業者（神奈川県立・公立・JSS共同事業体）が公共施設（栄区民文化センター・リリス）の運営を行うことになった横浜市栄区からの要請を受け、開催時期・対象・対象施設・趣旨・事業予算などを決定するために綿密な打ち合わせが行われ、具体的な内容が決定された。

開催時期は平成18年4月から平成19年3月までの間12回、3歳から5歳の幼児とその親を対象に、4項目に分けた造形活動を提案した。①画用紙などに絵を描くことや、おりがみなどを貼り付けて楽しむことができる平面作品、②粘土を使って楽しむ立体作品、③作品に動きを取り入れた作品、④音を取り入れた作品の4項目である。その4項目を3回ずつ、計12回の造形ワークショップとして行い、受講した親にアンケート調査を実施しながら、改善することを計画している。

具体的な制作については各3回ずつの内容となり、受講する子どもの年齢及び人数と受講する時期、そして前回の実践における反省によって、内容を検討していくことを計画している。そこで、同項目のなかでも内容を変更しながら行う予定で計画されている。

ワークショップの時間は1講座につき2～3時間を設定している。これは受講する子どもたちの年齢により集中力も異なるため、その場に応じた対応を考慮したことによる。実践場所については、「アート・キャラバン」と題した出張訪問による新たな試みを提案した子育て支援を考慮し、栄区内の幼稚園・保育所または施設などとし、申し込みの受講生がその場所を決定して開催することとする。

## (2) 分析の視点

ワークショップの実践を通じた観察とアンケート調査を行うことにより、次の点について考察を行う。

① 第一に、どのようにすれば子どもたちが造形表現を通じて意欲や達成感を得ることができるか。そして、親は子どもたちと造形を通じてどのように関わっていけばよいかということである。

子どもたちが活発で明るく、安全に活動できること、作品づくりに興味関心をもつこと、自分のアイデアや思いを具体的にかたちにすることができるなど、実践者がどのように関わることにより達成できるかということ考察していく。そして、親が子どもたちへ明るく活発に活動できるような支援、興味関心をもたせるような声掛け、一緒に手順を考えて制作に取り組むことができたかななどの考察を行う。

② 第二に、保護者が造形に対してどのようなイメージをもち、そしてどのようなことに期待をしているかということである。

今回の活動が子どもの創造性を発展させることにつながると感じているか、そして、具体的にどのような活動をワークショップの場で期待しているのかということ、アンケート調査を中心に考察する。

③ 第三に、学生が子育て期にある親の実際の姿を理解することができるか。そして、その親とのコミュニケーションを促進するためには、どのような工夫が必要かということである。

子どもとのコミュニケーションだけではなく、子育て期にある親の実際の姿を理解することができるか、その親とのコミュニケーションの促進について実践を通して学ぶことができたかななどを、実践を通して考察することにより、今日求められる子育て支援者としての保育者の資質を涵養する。

④ 第四に、行政が大学のもつ知的資源の下、親子のコミュニケーションを促進する実践活動を通じた子育て支援を提供する場を設定することで、いかなる効果を得ることができるかを検討する。現代社会における子育ての情勢を鑑み、各行

政が積極的に地域の子育て支援政策を講じている中、横浜市栄区の打ち出した「アート・キャラバン」は、栄区民が平等に参加できるよう、保育園・幼稚園・子育て支援サークル等に出張訪問を行う、という新たな試みを提案している点に特徴がある。行政側から見た当該事業の効果については、栄区民文化センター・リリスの企画担当者から意見聴衆を行う。

## 3. 結果と考察

本研究では、造形ワークショップ「アート・キャラバン」の実践のうち、第1回「きせつをかたちにーおりがみをつかった壁面装飾」(平面構成)を事例として分析、検討を行う。そこから浮かび上がった実践における効果や問題点、改善点に基づき、実践者が次回の造形ワークショップの実践を改善したプロセスについて、実践者の立場から考察する。

### (1) 実践事例：「きせつをかたちにーおりがみをつかった壁面装飾」(平面構成)

日時 平成18年6月10日(土) 13:00~15:30

会場 小菅ヶ谷地域ケアプラザ(横浜市栄区)

受講生 親17名、幼児(2~4歳児)17名

実践者 立体造形を専門とする本稿の第1著者が主な指導者であった。これに加え、大学生2名が補助的な立場で実践者として参加した。

**実践の概要** 本実践は子育て支援サークルを中心とした受講生17組34名で構成された。壁面装飾制作において、6月という季節を考慮してアジサイとカタツムリを2組ずつ制作し、一組は好きな色の4つ切り画用紙に装飾した。もう一組は、あらかじめ男の子と女の子などを貼り付けてある長さ5メートルのジャンボロール画用紙を用意し、みんなで大きな装飾作品を完成することにした。

導入では、梅雨の話をする事により、子どもたちがアジサイとカタツムリを連想するように導いた。しかし、3、4歳児に何もない状態からアジサイやカタツムリをつくることは困難なことも予想されたため、制作に必要なアジサイとカタツムリの「型」を用意した(図1)。具体的には、身のまわりにある紙皿やモールなどを使用し、画

用紙やおりがみをでんぷん糊と液状合成のりを使って貼り付け、パスでオリジナルのアジサイやカタツムリを制作していく。「型」を使った制作というと、ぬり絵や組み立てキットなどのようにつくるだけで創造性がないイメージをもちやすいが、「フォルメン線描 (Formenzeichnen)」による「型」を用いて「子どもの内側にフォルムを生じさせる」と提唱したシュタイナーについて西平 (2003) は、「型」の逆説として次のように述べる。「型は〈次の動き〉を生む。この〈次の動き〉は、型に入るための意識的な動きではない。むしろ、そうした意識的な動きが止まった時に、自然に内側から生じてくる〈次の動き〉である。そしてその〈次の動き〉が、そのまた次の動きを発生させ、そのまた次につながってゆく。つまり〈流れ〉になる。」つまり、「型」を用いることは、その一歩先に生じる〈次の動き〉をねらいとしている。今回の実践において「型」を用いることにより、子どもたちがアジサイの好きな色を選ぶことができ、カタツムリの殻の色やかたち、ツノの色や目のポーズなどを自由に選ぶことによって、〈次の動き〉—ここでは〈制作における意欲〉を引き出しながら活発な活動が可能となった。

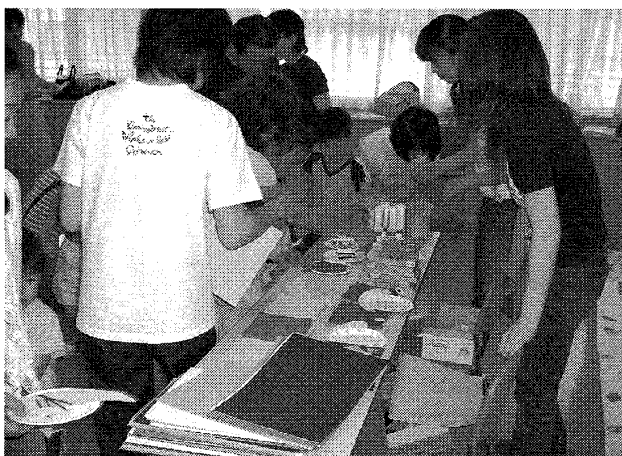


図1 アジサイとカタツムリの「型」を配る

展開においては、親が子どものつくりたいかたちを引き出すように支援をするように行った (図2)。技術的に難しい部分は親が支援 (図3) し、子どもとコミュニケーションを取りながら (図4)、子どもの描きたいものを最大限に発揮できるようにした。親子のなかには、親がつくってし

まい子どもは何もせずに見ているだけのところもあったが、実践者側の声掛けにより、子どもがづくことに興味関心を示して楽しむことができた。また、子どもに色を使うことの楽しさを実感できるように声掛けを行い、創作することの楽しさと共に、日常的に芸術が身近にある環境づくりの大切さを実感できるように配慮した。



図2 様々な親と子どもによる制作風景



図3 技術的に難しい部分は親が支援する



図4 コミュニケーションを取りながら制作する

完成したアジサイとカタツムリは1つずつ、それぞれが選んだ色画用紙に自由に装飾した。子どもの中にはそれだけでは満足できず、青の画用紙を雨のかたちに切り抜いて貼る子どもや、パスを使って装飾した上にお絵かきを楽しむ子どもなどもみられた。各年齢に応じて描かれた線や色もそれぞれが個性をもち、配置についても、「アジサイの上にカタツムリがのっているように」などの説明を意図的にしなかったこともあり、様々な捉え方による個性が光ったアジサイとカタツムリが完成した(図5)。

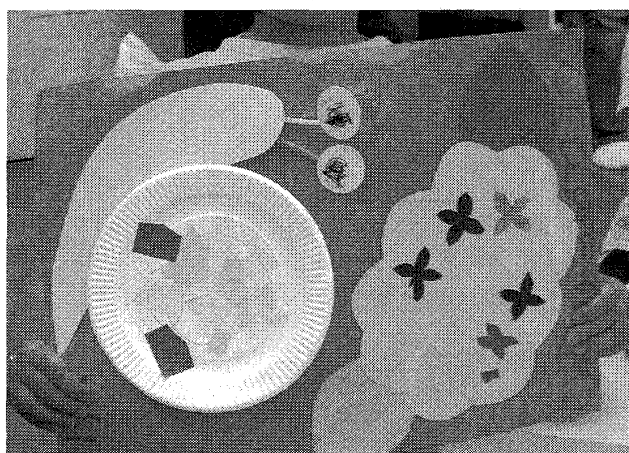


図5 個性が光った作品の完成

さらに、一つの壁面を装飾する長さ5メートルのジャンボロール画用紙にも、みんなで一斉に装飾を楽しんだ(図6)。これには他の子どもたちとのコミュニケーションをうまくとることができることや、他の子どもたちの作品と比べることにより、もう一度自分の作品を描き足すなど(図7)、客観的に自分の作品をみることができるような配



図6 みんなで一斉に装飾を楽しむ

慮がなされている。また、つくっている作品に対して感想を述べたり、親と話し合ったりすることも大切な要素である。なかには、他の子どもたちとコミュニケーションが取れない子どもなどもいたが、実践者が声掛けにより参加できるような支援を行った。



図7 作品を観ながら、足りないところを描き足す

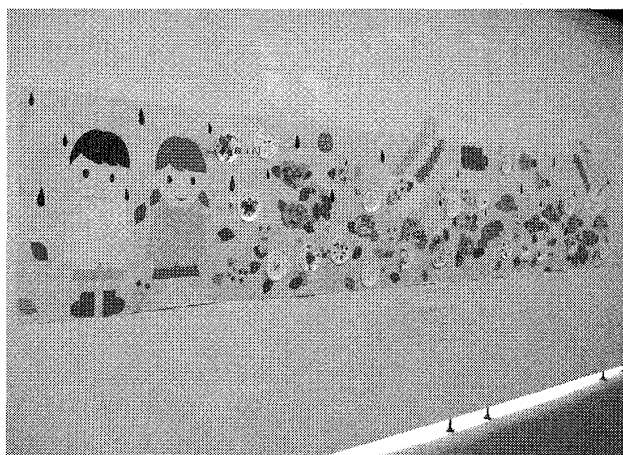


図8 完成作品

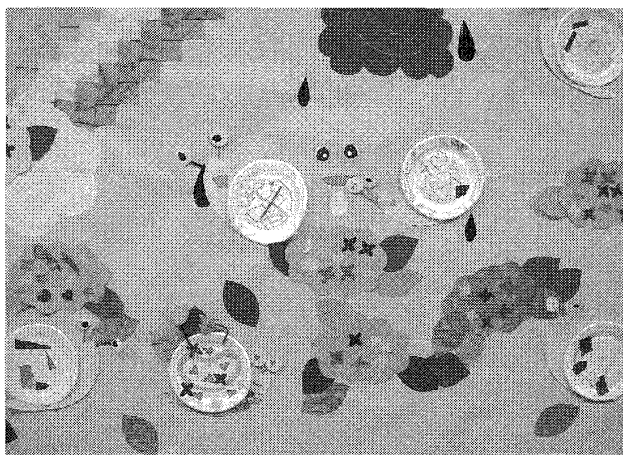


図9 完成作品(部分)

最後のまとめでは、みんなで一齐につくり上げた作品（図8・9）の鑑賞を行った。子どもたちは他の子どもたちが制作した作品を観て、「○○ちゃんの色がきれい。」「線がすごい。どうやったの？」など様々な意見交換が行っていた。

## （2）考察—今回の実践からわかること

以下、実践事例でとりあげた活動を、実践者の立場から、主に子育て支援、親子のコミュニケーション、学生の関わり、行政と大学との連携という視点に基づいて考察する。

① 造形表現における子どもの意欲と親子の関わりから 完成した作品からわかることは、「型」を利用して自由に制作することが、幼児の制作意欲を引き出しながら活発に活動ができたということである。磯部（2006）が「自発的で発生的な『描く』という行為は、『感じ取る』ことによって生まれてくるといえます。つまり、『感じる』ことなくして、『描くこと』は生まれえないということです。」と指摘しているように、自発的な行為がなければ絵を描くことは始まらないが、他の子どもたちと比較することができる共同制作においては、ある程度のかたちを準備しておかなければ、イメージを共有することが難しくなってしまう、制作に対する動機づけが低下してしまうことにつながりかねない。矢野（2006）は、大学の造形教育において、教育者が個々の学生の問題意識に応じたアドバイスを行う上で、「型」を用いた実践を行っている。その結果、型を用いた制作は‘つまずき’が少なく、学生それぞれが程度の差はあれ達成感を味わい、造形を苦手とする大学生も自らつくることの喜びを見出すことが可能であった。そこで本実践においても「型」を使うことにより、子どもたちの意欲を引き出すことを実践によって試みたところ、活動の冒頭の、カタツムリやアジサイのイメージを持ち活動に入る場面におけるつまずきがなく、イメージを共有しながら自己のアイデアを生かし活発に制作活動できる可能性が示された。

また、親が子どもの技術を支援し、声掛けを行いながら制作ができることも、子どもたちの安心

感へとつながり、子どものつくりたいかたちを引き出して達成感を味わうことができることが明らかとなった。さらに、親が制作に不安を感じないように、そして子どもが楽しく制作を行うことができるように、実践者が支援していくことも重要であることがわかった。

② 保護者への自由記述アンケート調査から 造形活動の実践後に、保護者を対象にアンケートを実施した。アンケートは尺度評定法を用いた量的測定と、自由記述から構成された（表1）。量的測定については本実践事例のみでは対象者が少なく（表2-1, 2-2）、今後の継続的なデータを蓄積した上での考察が必要であるため、本稿での考察は割愛し、自由記述の部分を取り上げる。自由記述から、親は自宅ではなかなか行うことが難しい絵の具や粘土などの造形活動を希望していることが多いということが伺われた。すなわち、「絵の具を使って体全体でつくることができたら楽しいと思います。」「家ではなかなかできないことを子どもと一緒に楽しむことができました。」「という記述がみられ、特に、体全体を使って汚れてもよいような内容を希望している親もあり、家ではできないながらも、造形に期待している部分も多いことが伺われた。このような意見から、今後の実践では、できるだけ絵の具や粘土など、普段家で思い切って使用することができない材料を使った課題が望ましいという示唆を得ることができた。また、出張訪問による新たな試みにより、「家でなかなかさせてあげられないことなので、次回の講座にも必ず参加したいと思います。」「子どもと一緒に楽しむことができました。家ではなかなかできないので、また参加したいです。」「という意見や、「(子どもが) 思った以上に自分の考えを表現できるようになってびっくりした。」「思っていたよりじっと落ち着いてできたので、驚きました。」「最初はたくさん子どもたちに緊張していましたが、後半は頑張っていて楽しんでいる姿がみられ、自分も楽しめました。」など、子どもの新たな一面などがみられ、親たちの造形に対する理解を得ることができたことも大きな成果といえる。

表1

## 「アート・キャラバン」アンケート

## 「きせつをかたちに一おりがみをつかった壁面装飾」

●1. あなたとお子さんのことについておたずねします。

(下線部について、空欄に記入、もしくは選択肢に○を付して下さい)

①. あなたについて

・お子さんとの続柄(1.母親・2.父親・3.祖母・4.祖父・5.その他( ))

・年齢(24歳以下・25~29歳・30~34歳・35~39歳・40~44歳・45歳以上)

・お子さんの数 男子( )人・女子( )人

②. お子さんについて

(本日参加したお子さんが2人以上いらっしゃる場合、年下のお子さんについてお書き下さい)

・年齢( )歳( )ヵ月

・性別(男・女)

・出生順位(第1子・第2子・第3子・第4子以降)

●2. 今回の講座でのお子さんの様子に関しておたずねします。以下の各質問について当てはまる番号に○をつけてお答えください。

【5=はい、4=どちらかといえば はい、3=どちらともいえないわからない、2=どちらかといえば いいえ、1=いいえ】

- |  |           |
|--|-----------|
| a. 活発で明るく、安全に活動することができましたか。                          | 5-4-3-2-1 |
| b. 作品例や説明を通して、つくり方を理解することができましたか。                    | 5-4-3-2-1 |
| c. 作品づくりに興味関心を持つことができましたか。                           | 5-4-3-2-1 |
| d. 用具の使用や片付け、マナー等を理解することができましたか。                     | 5-4-3-2-1 |
| e. 事前に考えたスケッチ等を具体的にかたちにすることができましたか。                  | 5-4-3-2-1 |
| f. 自分のアイデアや思いを活かして自己を表現することができましたか。                  | 5-4-3-2-1 |
| g. 時間配分にゆとりをもって取り組むことができましたか。                        | 5-4-3-2-1 |
| h. つくっている最中にわからなくなるなど、困ったことがありましたか。                  | 5-4-3-2-1 |
| i. 自信を持って制作に取り組むことができましたか。                           | 5-4-3-2-1 |
| j. 作った作品に対して、感想を言ったり、保護者と話し合ったりしましたか。                | 5-4-3-2-1 |
| k. 活動の中に、色やかたちなどの新たな出会いがありましたか。                      | 5-4-3-2-1 |
| l. 他の子どもたちの作品と比べてみることなど、客観的に自分の作品を<br>みるすることができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| m. 他の子どもたちや指導者とうまくかわることができましたか。                      | 5-4-3-2-1 |
| n. 絵の具やはさみなどの道具を使って、制作に取り組むことができましたか。                | 5-4-3-2-1 |
| o. 共同制作に積極的に取り組むことができましたか。                           | 5-4-3-2-1 |
| p. 全体として、今回の活動には満足していましたか。                           | 5-4-3-2-1 |

\*本日のお子さんの活動の様子についての感想を自由にお書きください。

( )

●3. 今回の講座に参加された感想に関しておたずねします。以下の各質問について当てはまる番号に○をつけてお答えください。

【5=はい、4=どちらかといえば はい、3=どちらともいえないわからない、2=どちらかといえば いいえ、1=いいえ】

- |  |           |
|--|-----------|
| a. 子どもが活発で明るく安全に活動できるように援助することができましたか。                         | 5-4-3-2-1 |
| b. 子どもの興味関心をもたせるような声掛けができましたか。                                 | 5-4-3-2-1 |
| c. 用具の使用や片付け、マナー等を子どもに理解させることができましたか。                          | 5-4-3-2-1 |
| d. 子どもが事前に考えたスケッチ等を具体的にかたちにするように援助する<br>ことができましたか。             | 5-4-3-2-1 |
| e. 子どもの考えたかたちを具体化するために、子どもと一緒に手順を考え、<br>制作に取り組むことができましたか。      | 5-4-3-2-1 |
| f. 子どもが実行不可能な思いを実現しようとしていて、どのように援助したらよいか、<br>難しさを感じることはありませんか。 | 5-4-3-2-1 |
| g. 材料・用具とその扱い等を理解することができましたか。                                  | 5-4-3-2-1 |
| h. 制作時間の配分にゆとりをもって取り組むことができましたか。                               | 5-4-3-2-1 |
| i. 子どもに自信をもたせるように、励ます、褒める、共感することができましたか。                       | 5-4-3-2-1 |
| j. 自分の考えを子どもに押し付けずに、子どもの考えに共感しながら制作する<br>ことができましたか。            | 5-4-3-2-1 |
| k. 今回の活動は、子どもの創造性を発展させることにつながると感じましたか。                         | 5-4-3-2-1 |
| l. 参加者と指導者、参加者同士と交流できましたか。                                     | 5-4-3-2-1 |
| m. 今回の活動は、地域コミュニケーションの輪をひろげ、豊かな人間づくりや社会<br>づくりに貢献するものだと思いますか。  | 5-4-3-2-1 |
| n. 今回の講座により、栄区の子育て支援事業に対する理解が深まりましたか。                          | 5-4-3-2-1 |
| o. 全体として、今回の講座には満足することが出来ましたか。                                 | 5-4-3-2-1 |
| p. 今後、機会があればこのような活動には参加してみたいと思いますか。                            | 5-4-3-2-1 |

\*本日の講座への参加された感想についての感想を自由にお書きください。

( )

●4. 今後の講座へのご要望等、ご意見を自由にお書き下さい。



表 2-1

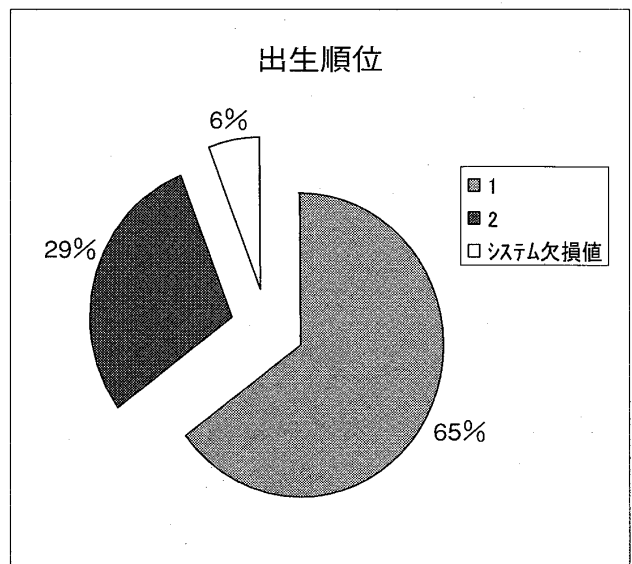
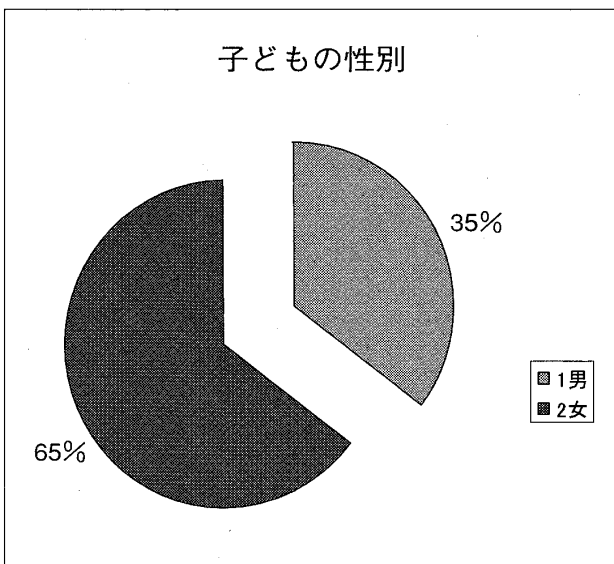
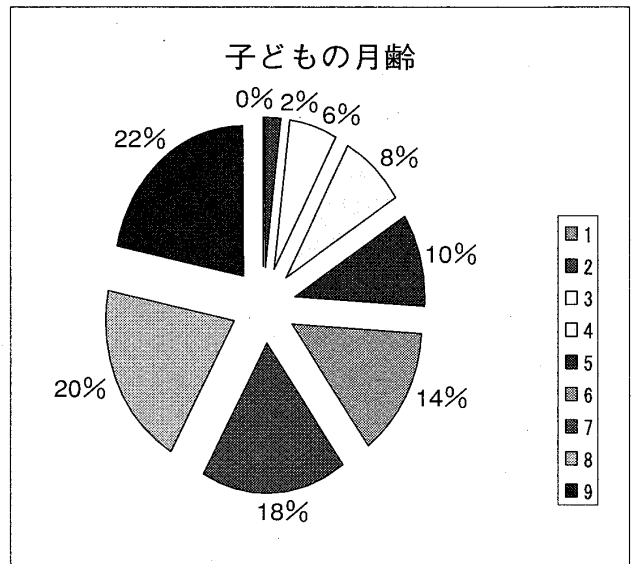
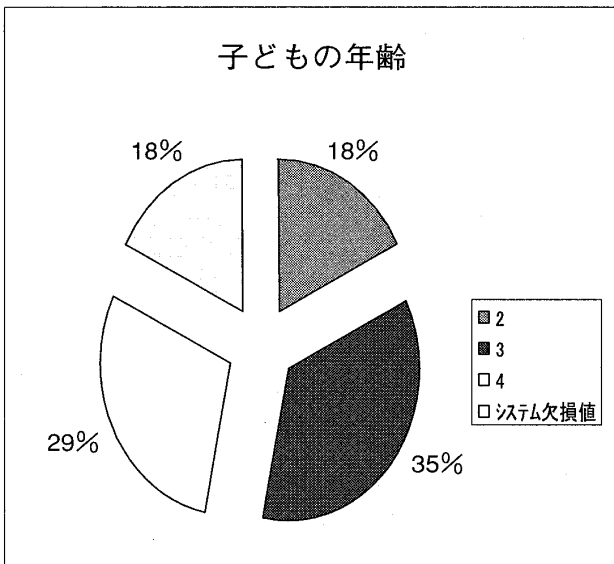
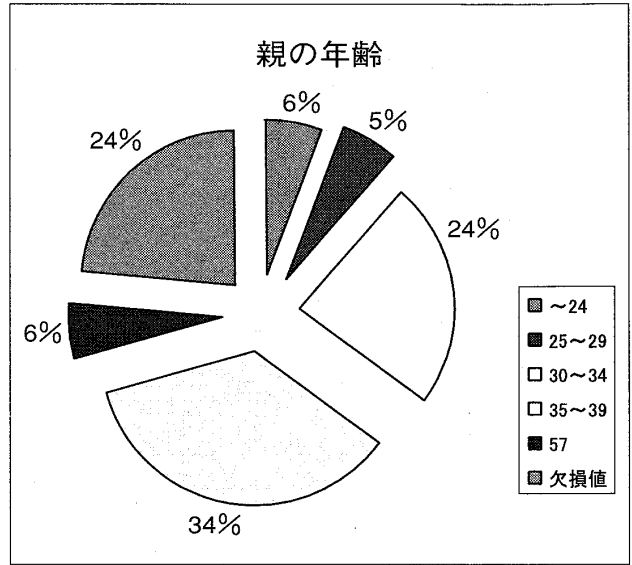
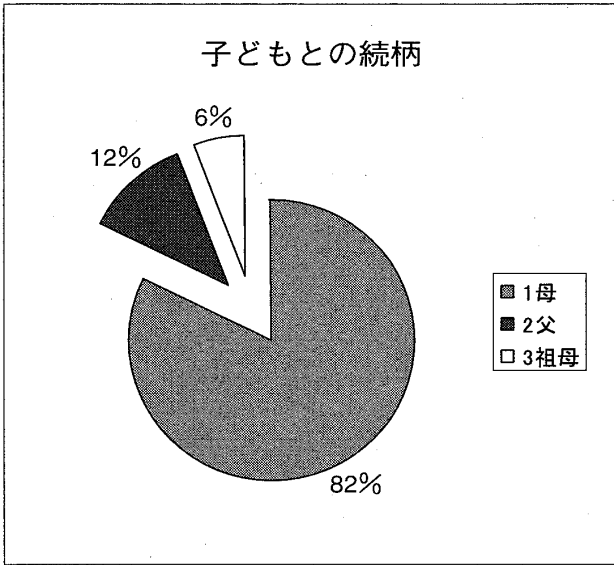


表 2-2

Q2(お子さんの様子に関して)	平均値	標準偏差	←はい 5	4	3	2	→いいえ 1	欠損値
a. 活発で明るく、安全に活動することができましたか。	4.53	0.80	11 (64.7)	5 (29.4)	0 (0.0)	1 (5.9)	0 (0.0)	
b. 作品例や説明を通して、つくり方を理解することができましたか。	4.18	0.95	8 (47.1)	5 (29.4)	3 (17.6)	1 (5.9)	0 (0.0)	
c. 作品づくりに興味関心を持つことができましたか。	4.47	0.72	10 (58.8)	5 (29.4)	2 (11.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	
d. 用具の使用や片付け、マナー等を理解することができましたか。	4.06	1.39	11 (64.7)	1 (5.9)	0 (0.0)	5 (29.4)	0 (0.0)	
e. 事前に考えたスケッチ等を具体的にかたちにすることができましたか。	3.57	1.09	4 (23.5)	2 (11.8)	6 (35.3)	2 (11.8)	0 (0.0)	3 (17.6)
f. 自分のアイデアや思いを活かして自己を表現することができましたか。	3.82	0.95	5 (29.4)	5 (29.4)	6 (35.3)	1 (5.9)	0 (0.0)	
g. 時間配分にゆとりをもって取り組むことができましたか。	4.41	0.87	11 (64.7)	2 (11.8)	4 (23.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	
h. つくっている最中にわからなくなるなど、困ったことがありましたか。	1.94	1.52	3 (17.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (23.5)	10 (58.8)	
i. 自信を持って制作に取り組むことができましたか。	4.18	1.13	9 (52.9)	4 (23.5)	3 (17.6)	0 (0.0)	1 (5.9)	
j. 作った作品に対して、感想を言ったり、保護者と話し合ったりしましたか。	4.12	0.86	7 (41.2)	5 (29.4)	5 (29.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	
k. 活動の中に、色やかたちなどの新たな出会いがありましたか。	3.94	1.14	7 (41.2)	4 (23.5)	5 (29.4)	0 (0.0)	1 (5.9)	
l. 他の子どもたちの作品と比べてみるなど、客観的に自分の作品をみることができましたか。	3.41	1.54	6 (35.3)	3 (17.6)	3 (17.6)	2 (11.8)	3 (17.6)	
m. 他の子どもたちや指導者とうまくかわることができましたか。	4.12	1.22	9 (52.9)	4 (23.5)	2 (11.8)	1 (5.9)	1 (5.9)	
n. 絵の具やはさみなどの道具を使って、制作に取り組むことができましたか。	4.24	1.20	11 (64.7)	2 (11.8)	1 (5.9)	3 (17.6)	0 (0.0)	
o. 共同制作に積極的に取り組むことができましたか。	3.88	1.22	7 (41.2)	4 (23.5)	4 (23.5)	1 (5.9)	1 (5.9)	
p. 全体として、今回の活動には満足していましたか。	4.59	0.71	12 (70.6)	3 (17.6)	2 (11.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	

Q3(講座に参加した感想)	平均値	標準偏差	←はい 5	4	3	2	→いいえ 1	欠損値
a. 子どもが活発で明るく安全に活動できるように援助することができましたか。	4.35	0.70	8 (47.1)	7 (41.2)	2 (11.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	
b. 子どもの興味関心をもたせるような声掛けができましたか。	4.00	0.94	6 (35.3)	6 (35.3)	4 (23.5)	1 (5.9)	0 (0.0)	
c. 用具の使用や片付け、マナー等を子どもに理解させることができましたか。	3.88	1.05	6 (35.3)	5 (29.4)	4 (23.5)	2 (11.8)	0 (0.0)	
d. 子どもが事前に考えたスケッチ等を具体的にかたちにするように援助することができましたか。	3.44	1.15	3 (17.6)	5 (29.4)	5 (29.4)	2 (11.8)	1 (5.9)	1 (5.9)
e. 子どもの考えたかたちを具体化するために、子どもと一緒に手順を考え、制作に取り組むことができましたか。	4.29	0.92	9 (52.9)	5 (29.4)	2 (11.8)	1 (5.9)	0 (0.0)	
f. 子どもが実行不可能な思いを実現しようとしていて、どのように援助したらよいか、難しさを感じるがありましたか。	2.29	1.36	1 (5.9)	3 (17.6)	3 (17.6)	3 (17.6)	7 (41.2)	
g. 材料・用具とその扱い等を理解することができましたか。	4.59	0.62	11 (64.7)	5 (29.4)	1 (5.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	
h. 制作時間の配分にゆとりをもって取り組むことができましたか。	4.71	0.69	14 (82.4)	1 (5.9)	2 (11.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	
i. 子どもに自信をもたせるように、励ます、褒める、共感することができましたか。	4.31	0.95	9 (52.9)	4 (23.5)	2 (11.8)	1 (5.9)	0 (0.0)	1 (5.9)
j. 自分の考えを子どもに押し付けずに、子どもの考えに共感しながら制作することができましたか。	3.81	1.11	6 (35.3)	3 (17.6)	5 (29.4)	2 (11.8)	0 (0.0)	1 (5.9)
k. 今回の活動は、子どもの創造性を発展させることにつながると感じましたか。	4.06	0.83	6 (35.3)	6 (35.3)	5 (29.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	
l. 参加者と指導者、参加者同士と交流できましたか。	4.24	0.83	8 (47.1)	5 (29.4)	4 (23.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	
m. 今回の活動は、地域コミュニケーションの輪をひろげ、豊かな人間づくりや社会づくりに貢献するものだと思いますか。	4.71	0.59	13 (76.5)	3 (17.6)	1 (5.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	
n. 今回の講座により、栄区の子育て支援事業に対する理解が深まりましたか。	4.18	1.07	8 (47.1)	6 (35.3)	2 (11.8)	0 (0.0)	1 (5.9)	
o. 全体として、今回の講座には満足することが出来ましたか。	4.71	0.69	14 (82.4)	1 (5.9)	2 (11.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	
p. 今後、機会があればこのような活動には参加してみたいと思いますか。	4.88	0.33	15 (88.2)	2 (11.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	

そのなかで、実践における今後の課題も残された。「同年齢のお友達と遊び出してしまい困った。」「課題を出されるのはあまり好きではないようです。」「途中で飽きてしまった。」などの意見がみられ、特に2、3歳児では親から離れて他の子どもたちと制作することの難しさを痛感した。異年齢の子どもたちが、積極性をもって全員が参加するにはどのようにしたらよいかということが今後の課題である。

③ 参加した学生の視点から 今回の実践に参加した学生が、子どもたちだけでなく、日ごろ関わるのが少ない親とのコミュニケーションの促進を通して、保育者としての前向きな姿勢と資質を涵養するうえで大きな効果が期待される。そのことを感じ取ることができる学生からの意見の例を挙げておく。

「今回のアート・キャラバンを終えて気付いたことは、子どもたちの笑顔と同様に私たちも自然と笑顔になれることです。子どもたちが帰る際に本当に楽しそうな笑顔で『ありがとう』や『楽しかった』と声を掛けてくれることは何よりも嬉しく、次回も頑張ろうと私たちの意欲につながってくれる大きなものとなっています。保護者の方と関わるなかで、子どもに興味・関心をもたせる声掛けや主体的に活動できる援助の仕方など学ぶことが多くありました。今回の準備では、異年齢の子どもたちということを考慮して、発達段階にあった造形や安全性、その季節とテーマにあった内容、さらに共同制作についていかに考えるかということが大変であったと思います。次回以降も、これまで培ってきた経験や知識を生かしながら改善して、アイデアと工夫に頑張っていきたいと思えます。私たちはアート・キャラバンを通して、今後の保育者となるためにとても貴重な体験をすることができていると思います。」

今後、継続的な実践を通して学生のこのような意識や態度がどのように変わっていくかということ、具体的なデータとして導き出し考察を行いたい。

④ 行政の視点から 今回のアート・キャラバンについて、事業側からの効果的な実施方法とい

う視点からの意見を挙げると、「事業の性質上、幼児教育という側面を重視し、専門的な知識を持つ大学との連携により、事業精度を高めることができる実践であった。」「地域専門機関（大学）との連携により、より地域に密着したサービスが可能となった。」「企画段階から連携を図ることにより、専門的な知識に裏打ちされた情操の効果の高い内容の実践が得られた。」「事業実施への参加を得ることにより、子どもたちの心理・行動を理解した対応が可能となった。」「事業実施の結果に対し、より専門的な検証を行うことにより、事業運営に効果的なフィードバックを行うことができた。」など、子育て支援の一環として大学と連携することにより、大学のもつ知的資源を提供した実践を通して、広く栄区の子育て支援に有効であるという可能性が期待できる。

このように今回の実践をまとめると、幼児と親とのコミュニケーションが促進され、また大学の指導者、学生と親子の間にも様々なコミュニケーションがみられ、さらに行政と大学との連携の重要性が示されたことで、この造形ワークショップが子育て支援に有効であることが示唆された。

さらに、今後の継続的な実践に向けて、親子のコミュニケーションの促進、大学のもつ知的資源の提供、さらには両者を結びつける場を提供する行政の役割、という、実践活動を通じた子育て支援における3者の役割について考察を行う予定である。

#### 4. おわりに

今回の造形ワークショップ「アート・キャラバン」の実践は、成果を一般公開するように計画されている。出来上がった子どもたちの作品は「アート・キャラバン展覧会」と題し、栄区民文化センター内ギャラリーにて約一週間の展覧会を2期（夏と冬）に分けて行うことにより、広く栄区民の地域理解を得られるように計画中である。また、本稿では実践事例を報告したが、今後実践を積み重ねていく中で、質的、量的データを蓄積し、より客観的な知見を導き出し、造形による子育て支援の更なる可能性を追究していく必要がある。

今後はアート・キャラバンを通して、子どもが活発で明るく安全に活動できるように支援する場を提供し、地域コミュニケーションの輪をひろげ、豊かな人間づくりや社会づくりに貢献できる造形ワークショップにおける子育て支援を目指していきたい。

## 引用文献

- 大都市子育て環境研究会（代表研究者：斉藤歎能）  
 （2003）． 大都市の子育て環境における健康・心理面の課題分析に関する調査研究 平成14年度児童環境づくり等総合調査研究事業報告書
- 松永愛子（2005）． 地域子育て支援センターの役割について—状況の多重性の中での「居場所」創出の場として— 保育学研究, 43, 166-178.
- エルンスト＝ミヒャエル・クラウニヒ他著、森章吾訳  
 （1994）． フォルメン線描・シュタイナー学校での実践と背景 筑摩書房
- 西平 直（2003）． シュタイナー教育のアート・「フォルメンが想像力を育む」とはどういうことか 子どもたちの想像力を育む—アート教育の思想と実践, 93-111
- 磯部錦司（2006）． 子どもが絵を描くとき 第2章 子どもが絵を描く意味 一藝社, 11-26
- 矢野 真（2006）． 子どもの造形支援者育成のための‘型とかたち’—石の模刻制作における実践研究を通して—, 大学造形美術教育研究第4号, 2-7

## 要旨

本研究の目的は、横浜市栄区と鎌倉女子大学との連携事業による造形ワークショップである「アート・キャラバン」の実践を通して、行政と地域住民、大学との連携による子育て支援について検討することである。

実施形態として、平成18年4月から平成19年3月までの間、幼児とその親を対象に、4種類の造形活動を3回ずつ、計12回の造形ワークショップを行い、受講した親にアンケート調査を実施することを計画している。今回は、初回調査から浮かび上がった実践における効果や問題点、改善点に基づき、実践者が次回の造形ワークショップの実践を改善したプロセスについて

報告を行う。

実践の中では、幼児と親とのコミュニケーションが促進され、また大学の指導者、学生と親子の間にも様々なコミュニケーションがみられ、造形ワークショップが子育て支援に有効であることが示唆された。さらに、今後の継続的实践に向けて、親子のコミュニケーションの促進、大学のもつ知的資源の提供、さらには両者を結びつける場を提供する行政の役割、という、実践活動を通じた子育て支援における3者の役割について考察を行った。

（2006.10.30 受稿）